

再生

第一章 プラナリア



1 おなり！

まず、自分の事から話そう。三十三才、妻帯者。子供は一人。女の子だ。五才。とても可愛い。名前は歩^{あゆみ}。

三十歳の時、M県に八十坪の土地を買い、家を建てた。空気はよいし、子供の環境も抜群だ。ジャスコも、シネコンもある。その代

わりに往復4時間の通勤時間と終身ローン。
M県から出発して、N県を通過し、O市の
勤務先につく。どこが県境か知らないけれど、
M県からN県への車窓は自然が一杯。溪谷と
清流、広がる田園、奥深い山を通り過ぎる。
時々靄がかかると中国の水墨画のような風景
になる。旅行なら、歓声が上がるだろう。だ
けど、僕にとっては、単なる景色だ。

「毎日が小旅行ですね」

からかい半分でよく言われる。窓の外が突
然真っ赤に紅葉していたり、雪景色になって
いたりして、感嘆する事もあるが、殆どの時
間は眠っている。

次に僕の仕事について話そう。

K薬科大学5階にある薬剤学研究室。大
きな窓。実験台が2つ。乱雑に並べられた
実験器具。薬品棚。後ろにサントリーのだ
るまが一本忍ばせてある。所々に塩酸で穴
の開いた白衣。仕事をしていたという勲章。

僕は薬剤学の講師である。新制度に押し出されるように助手から講師になった。でも仕事は助手の時とほとんど変わらない。学生実習の準備と後片づけ、講義の出席取り、黒板消し。お情けの講義が一コマ。ラグビーの顧問。そして最後が研究。その順番だ。

去年一年間、K大の研究室に通った。同じKでも国立のK。准教授になるためには学位が必要だった。僕が准教授を望んだんじゃない。三十を超えて助手というのはなあと、教授が気を遣ってくれた。自分の研究室の世間体も当然ある。いくらぼんやりしていてもそれくらいは分かるよ。僕は全然助手でもOKだった。その方がよかった。

僕はK大で「おなり」って呼ばれた。

教室に入っていくと、一斉に、「おなりー」と声が上がる。一種のイジメなんだ。「私大の馬鹿がやってきたぞ」。「馬鹿殿のおなりー」。初めは何のことか分からなかった。分かってても腹なんか立たなかった。偏

差値が年齢差ほど違うんだから。

そこでの研究テーマがインシュリンの経皮吸収。出来ないことをやってることについては少しも変わらない。だが最近あの研究室は、動物実験の段階だが、皮膚に埋め込むバイオ人工膵臓という画期的な方法に成功した。モルモットにせつせとインシュリンを塗っていた僕はやはり「おなり」だと思う。そして、まだ、助手のままだ。いや、お情けで講師になった。准教授は遙かに遠い。

校庭に赤とんぼが舞い始めるとやがて夏は終わる。この時期に飛ぶ赤とんぼを盆トンボ、精霊トンボというらしい。夏の中に秋が息づき始める。

九月一日。

蝉の声がぴたりとやんだ。耳を澄ませても、全く聞こえない。昨日は、羽を枯らした飛べない蝉を何匹も見た。一昨日は、ツクツク法

師がなくのを聞いた。

九月二十日

前期の試験が始まる。三十度を超す暑い日もある。でも、夏はほぼ死んだ。

九月二十五日

遊びに来る学生もない。でも、ラグビーの練習はやっている。試験に余裕があるのか、諦めているのか、多分後者だろう。

試験の監督がない時は、暇だ。バーナーで加熱している^{るっぽ}坩堝を、無表情に時々眺める。何を溶かしていたんだっけ。あくびをする。時間がゆつくりと過ぎて行く。

九月三十日。

今朝は朝から雨が降っている。

雨の中で、ラグビーの練習をやっている。

今日も時間がゆつくりと過ぎて行く。

電話のベルの音が鳴った。机の上に転がっている電話の子機を取る。教授の大声が耳に響いた。思わず電話を耳から三十センチ遠ざけた。

「直ぐに部屋に来てくれ」

受話器を持ったまま、バーナーを止め、窓際に移動する。グラントを見下ろす。雨の中で、ラグビーの練習をする学生が僕に気づき、手を振る。僕も笑顔で応える。僕はラグビー部のOBで、そして、もったも熱心な部員でもある。

僕の返事も聞かずに電話は切れていた。思い出したように部屋を見渡すと、部屋はシーンとしている。様々な物が雑然と肩を寄り添わせている。フラスコ、コルベン、液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー、微量天秤、カラム。僕もその中の一つになったような気がする。秋はいつもそうだ。夏も冬も含んでいる。春はその予兆さえない。僕はいつも同じ季節にいる。春の出来事も、夏の出来事も、冬の出来事も、記憶に変わると、同じ季節になる。

部屋を出ると、メールボックスに僕宛の手紙が入っているのに気づいた。個人宛の

手紙は珍しい。木製の小物入れに入っていたような茶色の薄い封筒。だが、と、僕の思考が止まる。木製の小物入れなどどこで見たのだろう……。思考がまた動き出す。僕は手紙をメールボックスから抜き取り、差し出し人を見た。

「香川県丸亀市月島八浦、鈴木昭彦」

知らない住所だ。行ったこともなく、そこにいる知人も思い出せない。差し出し人の名は、頭の隅っこに少し引かかった。だが、明確な像を結ばない。もう一度、宛名を確認して、白衣のポケットに、手紙を押し込んだ。

長い廊下を歩く。ドアの隙間から、過酸化水素のにおいがしみ出してくる。学生の姿はない。不思議と誰とも会わない。靴の音だけが単調に響く。エレベーターで三階の教授棟に降りる。また、長い廊下を歩く。空気が湿っている。僕の影だけが動いている。

一番奥の部屋のドアをノックする。

「どうぞ」という声と殆ど同時に僕はドアを押していた。教授は、机の上の印刷物を忙しそうに束ねている。

「九時から教授会だ。年寄りには朝が早くて。要点だけを言う。ここ五年間、筆頭論文のないのは君だけだよ。K大で何をやってきたんだ。学生とラグビーするため来ているような奴は大学に要らないって言う教授もいるんだぜ」

そこで手を止めて僕を見た。

「後一年待つ。それでダメなら辞めてもらうしかない。もう、庇いきれんよ、日向。お前は万年助手で、そうか、講師か。あの時も新助手でいいという教授もいたんだ。おまえは講師で十分だろうがそうはいかないんだ」

いつもの小言に、僕は軽く頭を下げて、部屋を出ようとした。教授の言葉が僕を追いかけてきた。

「もう一つある。鈴木 of 私物を処分するらしい。ロッカーを開けるから立ち会ってくれって教務が言って来たんだ」

「鈴木？」

「薬理だけど、みんな忙しいだってさ」

「暇なのは俺だけ」

「まあ、まあ、そうひがむなよ。そこまで一緒に行こう」

教授はせかせかと書類を袋に詰め込んだ。

棟から棟をつなぐ回廊を僕と教授が、並んで歩く。僕の肩までしかない頭がせわしく動く。

「木村が帰ってくるんだよ。国立の博士課程だから、准教授、すぐに教授だろう。」

「あんたの何年後輩だ？」

「分からないすよ」と僕は興味なさそうに答えた。

「よく降るな」

教授が、二人のしじまを埋めるように言

った。

「ええ」

相づちを打つ。雨の中をラグビーの部員が走っている。

「分からない」

「……」

「わざわざ雨の中で」

「雨の日の試合もありますから」

教授が煙草を出す。向こうから女学生が三人やつてくる。

「煙草は」

「ああ」

教授が煙草をしまう。女子大生がすれ違う。

「煙草も自由に吸えないのか」と教授はため息と一緒に言った。

「運動会、大丈夫かなあ」

教授の言葉を見無視して、空を見上げながら僕は言った。

「運動会……。日曜日だろ」

「ええ、明日晴れれば」

「いくつになった」

「えっ」

「歩^{あゆみ}ちゃん」

仲人は教授だった。歩の名前を覚えてい
ると感心した。

「五才です」

「可愛いかな？」

「そりゃ、もう」

「家庭第一だな、このごろの若いもんは」

「このごろの若いもんですか」

回廊を曲がる。取り壊し中の旧館が見え
てくる。

「始まったな」

「ええ」

「雨の日にやらなくてもいいのに」

「ほこりがたたないすよ」

旧館には、古いグランドピアノがあった。

積もった埃に、亀の甲が描いてあった。ジ
アゾ反応。これさえ分かったら、お前らは

卒業だと、S教授が叫んだあの反応式だ。僕は未だに分からない。ピアノの蓋を開けると、ナイフで彫られた落書きがある。確か「革命」と読めた。その横にすごく幼稚な字で、「そんなこと書くめい」と彫られている。そんなことをぼんやりと考えていると、教授が突然足を止めた。

「四十年か……」

僕も立ち止まり、旧館を見上げる

「あそこに閉じこもっていた俺が、今は、教授だもんなあ」

「……」

「戦争だった」

「戦争？」

「戦争ごっこかもしれないが」

「僕らに戦争なんかないすよ」

「そうか。そうだなあ。戦争ごっこもないか、君らは。あの頃は自分一人でも社会を変えられると思っていた」

「社会ですか。すごいすね」

「そんなことを考えもしないか」

「ええ、全く」

教授は愛想笑いを浮かべる。この世代は、意味もない笑いを会話に挟む。団塊の世代っていうんだっけ。戦争も、飢餓も所詮他所の世界の事なんだ。僕には関係がない。通勤地獄、終身ローン、うるさい学生。黴の生えた教授。僕も結構戦争をしている。失業率がまた上がった。でも、僕とは関係がない。バンバンと銃を撃つ方が手っ取り早いかも知れない。とにかく先の事は考えない。明日の事は明日。一時、^{いつとき}一時を、心地よく過ごす。そう、それしかない。

「あっ、遅れる」

腕時計を見ると、教授は走り出した。

「じゃ、頼んだぞ」と言つて、一気に階段を上がった。